

Q&A

腹痛を契機に診断された巨大腹部腫瘍

解答：

胆管内乳頭状腫瘍 (intraductal papillary neoplasm of the bile duct ; IPNB)

解説：

IPNB は、胆管内腔に乳頭状増殖を示す胆管上皮性腫瘍と定義され、膵臓の膵管内乳頭粘液性腫瘍 (intraductal papillary mucinous neoplasm ; IPMN) の胆管カウンターパートとされる。

局在診断にはまず超音波、CT、MRI などの画像検査が行われ、胆管拡張あるいは肝内の嚢胞状腫瘍として描出され、内部に造影効果の見られる隆起性病変を認める場合がある。

ERC などの胆管造影では、IPNB が胆管内に乳頭状に突出するため、特に肝外胆管に発生した IPNB では胆管内陰影欠損像として描出される。

本症例では、ERC 時に十二指腸乳頭部に白色調の粘液栓を認め、除去により黄白色の大量の粘液の排出を認め (Figure 2A)、経鼻胆管ドレナージを留置し減黄を行った。胆道鏡では、拡張胆管内や嚢胞内に見られる乳頭状隆起とその周囲に拡がるイクラ状粘膜が特徴的とされ (Figure 2B)、表層拡大進展の判断に有用とされる。治療は肝左3区域切除・肝外胆管切除・胆嚢摘出術を行った。切除標本の肉眼像 (Figure 2C) では、嚢胞状に

拡張した肝内胆管病変に、内腔へ発育する乳頭状隆起を認めた。組織学的には内部に好酸性で豊富な細胞質を有した異型細胞が乳頭状・樹枝状に増殖し (Figure 2D)、一部間質への浸潤を認めた。

IPNB は進行が緩徐で、側方進展が見られ胆管壁を超えた浸潤が少ない、肝機能が比較的保たれている、などの理由により、外科切除後の予後は比較的良好とされる¹⁾が、根治切除の可否、上皮形態、間質浸潤の有無、リンパ節転移などに影響される²⁾とされる。

参考文献：

- 1) Yeh CN, Jan YY, Yeh TS, et al: Hepatic resection of the intraductal papillary type of peripheral cholangiocarcinoma. *Ann Surg Oncol* 11; 606-611; 2004
- 2) 窪田敬一, 蜂谷裕之, 多胡一馬: 胆管内乳頭状腫瘍 (IPNB): 予後. *肝・胆・膵* 65; 479-486: 2012

本論文内容に関連する著者の利益相反

: なし

出題：小山 展子 (川崎医科大学肝胆膵内科学)
 吉田 浩司 ()
 日野 啓輔 ()

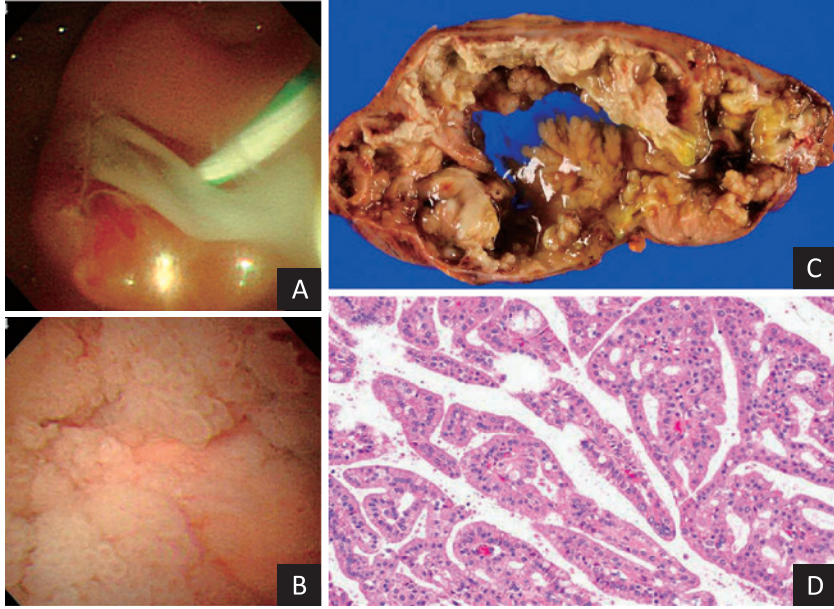


Figure 2. A: 內視鏡像 (十二指腸乳頭部), B: 經口胆道鏡, C: 切除標本 (肉眼像), D: 組織標本.